



鎮守の森だより

NPO 法人 社叢学会ニュース
第5号
2003年9月10日

社叢インストラクター養成講座 受講生 12 人 決まる

社叢学会副理事長 菅沼 孝之

都市の中の森といえば、大方は社叢であり、それは「ふるさと」を代表する森であることはご存知の通りです。ふるさとの森としての社叢は、東日本では落葉広葉樹の森や、スギ林が多く、西日本では照葉樹の森が多く見受けられます。落葉広葉樹林にしても照葉樹林にしても、植栽林以外の自然林は雑木林の範疇にはいって、自然林は開発には極めて弱い立場におかれています。社叢を削り、さらに社叢を孤立させ、適切な管理がされないまま、荒廃状態におかれている森が数多く見受けられます。

スギやヒノキの植栽林の管理法は林学の分野で多方面から研究されてきましたが、それでもすべてが分ったわけではありません。環境の保全、生物多様性の保全の立場から、照葉樹林や落葉広葉樹林をも見直そうと研究が進められていますが、まだ始まったばかりです。照葉樹林や落葉広葉樹林はもちろんのこと、植栽林にしても多様な環境に対応して森ができているために、きわめて細やかな管理法が必要です。

小面積でしかも照葉樹や落葉広葉樹を主とした

自然林からなる社叢、この地域の財産である社叢の保護管理ができ、また、スギやヒノキの植栽林であっても、社叢の大切さを分かりやすくガイドし、保護管理が出来る人を養成することは急務中の急務といえます。

本学会は設立2年目の事業として、この問題を取り上げ、社叢を看ることが出来る「社叢インストラクター」を養成することを計画しました。社叢インストラクター養成セミナーは少人数を対象とした実習に基本を置いたカリキュラムを組み、また、地域に応じた研修をしていただけるようなスケジュールを組んでいます。さらに今後も可能な限り、より高度な分野と課題をふくめて開講していく計画です。

なお、本年度の養成セミナーは12名のかたの応募を得まして、10月18日より開講します。また、一部に報道されました「社叢医」構想につきましても、まだまだ検討しなければならぬ事項が多く、現時点では資格認定までは実施できないものと判断しております。

「ニソの杜」と森神信仰

講師 金田 久璋

(滋賀短期大学非常勤講師)

(福井県文化財保護審議委員会委員)

はじめに

かつて『中日新聞』(2003.6.9夕刊)の「紙つぶて」というコラム欄に新進気鋭の作家若合春侑(わかひ・すう)さんの「意外な事実」と題するエッセイが掲載された。内容は明治神宮の森が人の手によって作られたものであると知った時の驚きと意外な事実について記したものである。

若合さんは、「私はてっきり太古の昔からあった原始の森を神社造営のために切り開いたのだらうと思っていたのだ。鬱蒼と木々が繁り、肉体と精神にやさしいイオンを発する森は、真夜中に歩いたら魔物と遭遇するかもしれないと怯えさせるのだから、天然の産物だと疑わないのも無理はない。……意外な事実を知って、まだまだ知らないことが多いのだなあ、と痛感する日々だ」と述べている。私は、この文章から森神信仰を考えるヒントがあるのではないかと考える。

森神信仰が成立する3つの形態

まず1つ目は、原初の森タイプ。これは、もともと森があって、そこに神社が創建されたタイプの森で、『常陸国風土記』にその成立をうかがわせる記事がある。2つ目は植林された森タイプ。これは、先述の若合さんの記された明治神宮の森をはじめとする人の手によって作られた森。若狭地方では、伝承として33回忌の弔い上げがすむとダイジョコさんになるといわれ、ミドリ塔婆だとかイキ塔婆というものを墓地に挿す。やがて、そういうものが生きついて森になったともいわれている。3つ目は聖地化・禁忌による禁足地化タイプ。これは神祀りなどによって小祠などをつくると、そこが聖地化され、禁足地となり、自然に木々が生え照葉樹林の森を形成する。若狭ではタブの木が中心の森が多い。

森神とは、聖地としての森をまつり場として、あるいは樹木を依代としてまつられる神で、地域によりモリサン、モリサマ、モリなどと称される。福井県大飯町のニソの森をはじめとする各地の森神は、祖霊の祭地として位置づけられている。

一本でも森

一般に社叢といえは密生した森を思い浮かべる

が、一本でも森として信仰されている地域が多々ある。平安中期の女流文学者清少納言『枕草子』(第115段)で「森は大あらきの森。しのびの森。ここの森。古枯の森。信太の森。生田の森。……。かうたての森といふが耳とまるこそ、まずあやしけれ。森などといふべくもあらず、ただ一本あるを、何ごとにつけたるぞ」と素朴な疑問をなげかけている。この一説から当時すでに一、二本の巨木でも森と称していたことがうかがえる。

「モリ」という日本語の語源については、種々の説があるが、朝鮮語の山・墓を意味する「モイ」が語源と考えられる。

若狭の森神信仰

若狭にはニソの杜・ダイジョコ・地の神(地神)・ジノッサン・地主荒神の森神信仰があり、これらは共通項が多い。

ニソの杜は、福井県大飯郡大飯町大島に所在する32ヶ所の森神信仰の聖地で、地名を付して、浦底の杜、瓜生の杜などと呼称されるが、ふだんは「モリサン」「ニンソー」と呼んでいる。霜月22日・23日の祭日以外は決して近づいてはならない禁足地とされ、タブや椎の巨木、椿・ヤブニッケイなどの照葉樹が生い繁っている。神木の下には小祠が安置されているものが多く、大島の二十四名(苗)の島の開拓先祖をまつるとされる。毎年、ニソ講、モリ講、モリマツリと呼ばれる霜月祭が行なわれる。

ダイジョコは、陰陽道の方位の神「大將軍」が転訛したと考えられる神で、若狭に普遍的に点在する森神信仰。ダイジョコウ・ダンジョコ・ダイジゴ・ダイジクなどとも呼ばれ、神名の表記も大將軍・大神宮・大地護・大上宮などの宛て字がされている。3年ごとに一巡する大將軍神の方位を侵せば「3年ふさがり」とされていることから、方除けの信仰と従来の民間信仰が習合したものである。

地の神(地神)は若狭各地にあるが、ジノッサン(地主様)や地主荒神は大飯町以西に分布し、石見の荒神と地主神・地の神とが習合した民間信仰である。ジノッサンは佐分利川中流から上流にかけてのみ分布している。

次回予告(第7回関西定例研究会)

日時：2003年9月27日(土) 13:30～15:30

場所：伏見稲荷大社儀式殿(京都市伏見区稲荷 075-461-7331)

テーマ：東アジアにおける杜の信仰と持続 台湾、日本、韓国の比較を中心に

講師：李 春子 氏(京都大学人間・環境学研究所博士課程修了)

人間圏と神道と環境

講師 陽 捷行
(農業環境技術研究所理事長)

今回の関東支部定例会は明治神宮の社叢を三先生方の案内により視察させていただいた後、参集殿において造営の詳しい講和を受け、参加者によるディスカッションを行った。

明治神宮の創建

明治神宮は、明治45年、明治天皇が崩御されたことを悼んだ国民の要望により創建された。

明治神宮を創建するにあたり、全国から40箇所の候補地があげられた。その中のひとつである代々幡村代々木は、英照皇太后は3回、昭憲皇太后は9回の行啓の歴史があり、皇室ゆかりの地であることや地況が良好で広大な敷地であったことにより明治神宮造営の敷地に決定された。現在、明治神宮は鬱蒼とした社叢に囲まれているが、造営前は雑木林や畑、草原であった。

明治神宮の森のかたち

明治神宮は、70haという広大な社叢を有しているが、造営は全国からの献木によって行われた。北は樺太から南は台湾と様々な地域から、実に樹種数は365種、その総本数は約10万本の献木があった。しかし、献木や植栽木だけで社叢を作るのではなく、敷地内に生育していた樹木を残し、有効活用している。現在では、病害によって多くは枯死してしまっただが、社殿の近くにあるアカマツの大木が有効活用の名残である。自然の遷移では、裸地から極相林の森に至るまで400~500年もの時間がかかる。しかし、明治神宮の森は人間の手によって、約90年まで短縮して形成させた森である。

現在では、明治神宮の森は遷移がすすみ、初期の優占種とは異なり、高木層にはシイ・クス・ケヤキなど、亜高木層にはヒサカキ・サザンカ・モッコク・

サカキなど、低木層にはアオキ・アズマネザサなどが優占しており階層構造が出来上がっている。森のかたちをみても重厚な森が出来上がっている。

社叢を形成している樹木

林苑の植栽計画にあたり、樹木の配植は構成木と風致木の2つの要素をもたせた。構成木は、この社叢を形成する主要な樹木であり、カシやシイ、クスなどをもちいている。また、風致木は、常緑広葉樹だけでは空間が単調になるために形や色の変化をもたせると同時に、季節を感じさせるための樹木で、ヒノキ・サワラなどの針葉樹やケヤキなどの落葉樹をもちいている。

また、樹木を植栽するにあたり「適地適木」をこころがけている。例えば、カツラの自生地は水気が多い生育環境であることから、沢の付近に植栽されている。

明治神宮の森の管理

社叢の管理は、計画時に作られた「明治神宮境内林苑計画書」の指針を大切に守りながら行われている。その中でも注目すべき管理は、落ち葉や枯れ枝の掃除の仕方と処理方法である。掃除は、参道や建物などの周囲にとどめておき、その他の場所は枯れ木を伐採するだけにしている。また、健全な森を維持してゆくために、収集した落ち葉や枯れ枝は森の地面に返すようにしている。このような管理によって、創建当時より樹木の本数が、S45年には5~6万本増加していた。樹木が増加すると森は鬱蒼とするが、人為的な管理をしないで自然の赴くままに森を見守ることで、今後は樹木の本数も適量になると考えられている。

前回の報告は、鍵和田又一さんでした。

次回予告(第8回関東定例研究会)

日時：2003年12月13日(土) 14:00~17:00

場所：東京農業大学・世田谷キャンパス 18号館1階1811教室

(世田谷区桜丘1-1-1 03-5477-2428)

テーマ：鎮守の森 CO2 調査報告書(仮題)

講師：大崎 正治 (國學院大学経済学部教授)

書籍紹介

「万葉の樹木さんぽ」

井上 俊・著

著者の調査によると、『万葉集』に登場する樹木は73種、『古事記』は36種、『日本書紀』は44種、『風土記』が54種で、合計207種となるが、重複があるため、この四書で105種となる。本書は、これらの樹木をさらに系統的に整理し、樹種別に82種に絞り、それぞれに詳細な解説を記している。森林インストラクターでもある著者は、「樹木を知るためには自然科学の植物学はもちろん大切だが、人間との関わり、つまり人文科学的なことも知る必要がある」と述べており、本書はまさに幅広く奥行きのある一書といえる。

羽衣出版・定価 1,429 円（税別）

事務局から

- 10月18日から21日までの4日間、京都の伏見稲荷大社を会場に開催される「社叢インストラクター養成セミナー」に、多数の方々からお問い合わせがありましたが、今回は12名の方に受講していただくことになりました。体験談など本誌に掲載を予定しています。
- 社叢学会亀岡支部（0771-22-1430 宮内）では、9月13日午後1時30分より亀岡市の大本本部第三安生館において総会ならびに記念講演会を開催します。記念講演は社叢学会理事

の片岡智子氏（ノートルダム清心女子大学教授）の「神遊びの歌の世界～カミとヒトの交わり～」入場無料です。

- 社叢学会大津グループ（077-527-3636 大津百町館）では9月20日午後1時30分より大津市の近江神社近江勸学館において、「鎮守の森をめぐる」と題して基調講演と社叢調査報告を開催します。基調講演は社叢学会副理事長の上田篤氏（京都精華大学名誉教授）が、調査報告は森の立地と景観、森の植生、社の建築空間などについて、それぞれの専門家が報告します。参加費は資料代として500円です。

***** お詫び *****

先般お送りいたしました会員名簿につきまして、下記の方々の記載が抜けておりました。誠に申し訳ありませんでした。お手数ですが、お書き込み下さいますようお願い申し上げます。（順不同・敬称略）
理事 芝原幸夫 561-0082 豊中市南桜塚 1-23-3
鈴木孝三 661-0035 尼崎市武庫之荘 1-33-1-707

編集後記

夏休みもあっという間に終わってしまった... サビシイ... で、9月になってとぼとぼと出勤すると、「10日に『鎮守の森だより』発送するから」とI事務局長のきびしいお達し。ひえ～。でもね、じつは夏休みの宿題の追い込みみたいに、いっしょけんめい原稿を書いているのは、何をかくそう！ I事務局長なんだから！（藤岡 郁）

発行人 社叢学会事務局 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NSビル5階
TEL/FAX06-4790-0155 E-Mail jim@shasou.org
社叢学会関東支部 〒171-0021 豊島区西池袋 2-36-1 ソフトタウン池袋 1101
TEL03-5950-6507 FAX03-5950-5184 E-Mail shasou@macrovision.co.jp

都市と神さま シンポジウムのご案内

社叢学会副理事長の上田篤氏の近著『都市と日本人 カミサマを旅する』の出版を記念し、かつ、日本の都市問題にカミサマという新しい視点を加えた問題提起を踏まえて、下記のようなシンポジウムを行ないます。奮ってご参加ください。

日時：2003年11月8日（土）午後3時～同5時30分
場所：賀茂御祖神社（下鴨神社）研修道場（京都市下鴨泉川町）
テーマ：都市と神さま
講師：上田 篤（京都精華大学名誉教授・都市計画学）
上田 正昭（京都大学名誉教授・歴史学）
米山 俊直（京都大学名誉教授・人類学）
蘭田 稔（京都大学名誉教授・宗教社会学）
司会：片岡 智子（ノートルダム清心女子大学教授・国文学）
資料代・会場整理費：500円
主催／奇三土会 後援／NPO 法人社叢学会
連絡先：京都市中京区三条堀町上る油屋町 89-707（Tel/Fax 075-231-7607）